

藤原宇合大夫、遷任して京に上る時に、
常陸娘子の贈る歌一首

五二二番

庭に立つ 麻手刈り干し 布さらす 東女を
忘れたまふな

京職 藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首

五二二番

娘子らが 玉くしげなる 玉櫛の 神さびけむも
妹に逢はずあれば

五二三番

よく渡る 人は年にも ありといふを 何時の間
にそも 我が恋ひにける

五二四番

蒸し衾 なごやが下に 臥せれども 妹とし寝
ねば 肌し寒しも